

## 詩神が孕む

— *Othello* における男性同士の絆 —

滝 川 睦

### I

1716年8月の第二週、折しも収穫たけなわの時期のことである。英国 Gloucester 州の Westonbirt とよばれる村 — Tetbury から数マイル南の、Cirencester と Bath を結ぶ街道沿いの村 — で、妙なうわさが広がった。Westonbirt は、London 在住の大法官府主事 (Master in Chancery) を務める Sir Richard Holford 所有の領地内にあったが、そこで彼の借地人兼土地管理人であった George Andrews が Walter Lingsey という若者と同性愛行為に及んだ、という話がまことしやかに囁かれたのである。Lingsey は Gloucester からやってきた「流れ者」(“foreigner”) であり、Westonbirt で農夫と教区委員を兼ねて務める Walter Watts に雇われている作男だった。うわさの出所は、ほかならぬ Lingsey 本人の口であった。

8月2日の夜帰宅しなかった理由を、同僚の作男たちに尋ねられた Lingsey は、次の様に答えた — 2日の真夜中ごろ彼が Bucklemore 橋の上で座ったり寝転がったりしていると、George Andrews が近づいてきた。George は彼の手をとると愛撫しはじめ、柔肌である、などとお世辞を言った。そんなことを数分繰り返したのち、George は露骨な態度で Lingsey のズボンに手を差し込み、農場の家でもっと楽しくやろうじゃないかともちかけた。同意した Lingsey と George は歩いて農家に向かい、酒の貯蔵室で祝杯をあげたあとで George の部屋に入っていった。そして寝台で男色行為にふけたのち、他人にこのことを漏らさぬよう、George は Lingsey に言い含めたという……。

. . . neither will he [George Andrews] live peasabably with his naighbours but does them all ronge and mischief he can, slandering them behind thayer backs to thayer creditors. And he is a self-consaited huy minded man ceshing fier at the lest spark of prevication that can be chosen to shew himself gret, and to abuse his naighbours and morder thayer reputations. . . . (qtd. in Rollison 71)

上の引用 — Walter Watts が領主 Sir Richard Holford に宛てた書簡の一部 — が如実に物語っているように、George が村の鼻摘まみであったことも、このうわさがあつという間に近隣の教区にまで広がっていったことの原因であったらしい。すでに9月のはじめには、George の

犯した忌まわしい罪に抗議する声が、Westonbirt 一帯に満ちあふれていたという。

そしてこの抗議の声は、ついに近代初期英国の民衆的制裁儀礼にまで発展していく。その儀礼は、名付けて「偽の出産」(“Mock Groaning”)。時は9月22日。George Andrews の犯した罪が、昼日中に Westonbirt の大通りでにぎやかに再演される。その儀礼の有様を領主に伝える、Gloucester 州在住の執事 Francis Goodenough の筆はいきいきとしている。

Walter Watts' wife furnished Lingsey with a mantua petticoat white apron & head clothes that he might look something like a woman. One Rolfe of Luckington was the midwife. After the invited company, wch was numerous, had pleased themselves with the ale & good things, Lingsey by their assistance was delivered of a child, viz. a wad of straw made up and dressed with clothes in that form, wch they said was a male child, wherupon the company drank plentifully and rejoiced up exceedingly at the birth. After a little while they resolved to have the child christened, and picked upon one of their company, Samuel Wallis by name (a scandalous fellow) to be parson, who som say raised the child to the churchyard & there (for he could not get into the church) after he had pronounced so much of the form of Baptism as he could remember Christened the Child, whom the Godfathers, whose names I do not know (for their was no Godmother) named George. The said Parson threw water upon it & sd I baptise thee in the name of the Father the Son and the Holy Ghost. After this was done the company fell to their rejoicings & continu'd their mirth until the barrel was empty & then sent & invited som of the women of the place to wate with the lying in woman as they term'd Lingsey. This being over all things were quiet, for neither George Andrews or any of his family took any notice of it. (qtd. in Rollison 73)

舞台は Walter Watts の屋敷と、村の通り。産所は楡(エルム)の木の下。婦人用上衣を着せられた Lingsey は妊婦の役を演じ、酒の勢いでごきげんな村人が囃したてるなか、産婆の助けをかりて赤ん坊を出産する。生まれてきた男児は、布きれを巻いた藁人形。安産を祝して酒が見物人にふるまわれたのち、サープリスまがいの白いエプロンを両肩に巻きつけた「ならず者」が赤子に洗礼を施す。赤子は「父親」の名にちなんで George と命名される(村の教区牧師 John Jackson の報告によると、それぞれ男色と男色者を意味する“Buggary”や“Buggarer”が名前に選ばれたらしい)。

この民衆的祝祭の主導者は、かつてWestonbirt の農場において Sir Richard Holford の借地人であった Isaac Humphries、Luckington 村出身の鍛冶屋 Daniel Rolfe、フィドル奏者の Thomas Bennett、隣村で父親が宿屋を経営する Joseph Chappel。彼らが音頭を取り、

Westonbirt の村人のほかに近隣の教区から百人以上もの人びとが、この制裁儀礼に参加したという。

以上が、歴史家 David Rollison が“Property, Ideology and Popular Culture in a Gloucestershire Village 1660-1740”と題する論文で詳述している、「偽の出産」の儀礼の概要である。男性が女性の分娩を模倣するという意味で、文化人類学者なら「擬娩」(couvade)の一種に分類するやもしれぬ Westonbirt の「偽の出産」が、「ラフ・ミュージック」(rough music)、「スキミントン」(skimmington)、あるいは「シャリヴァリ」(charivari)などの民衆的制裁儀礼のパラダイムに則って構成されているのは明らかである。つまり、Westonbirt で催された「偽の出産」は、同性愛という形で共同体の倫理的コードを侵犯した者を辱め、制裁をくわえるための儀礼であったわけである。

だが、われわれがここで注目したいのは、Rollison が指摘する儀礼をめぐる葛藤 — Peter Burke が説く「大なる伝統」(Great Tradition)と「小さな伝統」(Little Tradition)の葛藤 — ではない。Westonbirt で祝祭儀礼が演じられる百年以上も前に創作された、Shakespeare の *Othello* (1602年頃創作)に、「偽の出産」によって表象される同性愛嫌悪 (homophobia) が、解釈の糸口を与えているのではないかということである。

## II

*Othello* をカーニヴァル的テキストとして解読し、シャリヴァリに代表される民衆的祝祭が、その「喜劇的な下部構造」(comical substructure)となっていることを看取したのは Michael D. Bristol である。彼は論文“Charivari and the Comedy of Abjection in *Othello*”において、劇の冒頭、窓辺の Brabantio に投げかけられる Iago と Roderigo の中傷、嘲りの言葉、騷擾の気配、そして Iago の即興が、共同体の掟を犯した者に対して仕掛けられるシャリヴァリの構成要素そのものであることを指摘する。本劇において「シャリヴァリ」の犠牲者となるのは、「アブジェクション」(abjection)を身をもって味わう Othello。彼の「人種的他者性」(racial otherness)、そしてそうした他者性を体現するムーア人と、白皙の美女とのあいだに成立する異性愛が祝祭の場で嗤われるのだという。しかも *Othello* が初演された17世紀初頭においては、人種差別的感性があたりまえのものであり、「制裁」がくわえられる人種的他者である主人公に、当時の観客は同情しなかったであろうと Bristol は推測する。

*Othello* の主題のひとつである女性嫌悪 (misogyny) が、シャリヴァリの基調ともなりうることを看破した Bristol の炯眼は、さらに本劇の登場人物たちの姿に、シャリヴァリを宰領する立役者の姿を透視していく。すなわち、シャリヴァリの三種類の構成員 — 花婿を表象する道化 (the clown)、花嫁を表象する異性装者 (the transvestite)、独身の男性あるいは若者を表象する「結婚に鞭打つ者」(the ‘scourge of marriage’) — に、本劇においてはそれぞれ Othello、Desdemona、Iago という名がつけられているわけである (144-45)。

ここまで Bristol の説をたどってきて気づかされるのは、「シャリヴァリ」が仕掛けられる動機として、Othello の人種的他者性にあまりにも重きがおかれている点である。たとえば、窓辺の Brabantio に投げつけられる次の Iago の台詞は、シャリヴァリが企てられる原因のひとつ——年齢の差を無視した結婚——を思い出させはしないだろうか。

Even now, now, very now, an old black ram

Is tupping your white ewe! (1.1.87-88)

あるいは、父親を裏切った Desdemona 像を Othello の胸に深く刻みつける、Brabantio の次の台詞などは、シャリヴァリやラフ・ミュージックの最大のターゲットが、家父長制度を蔑ろにする「女丈夫」(the shrew) や「がみがみ女」(the scold) であったことを連想させるのではないだろうか。

Look to her, Moor, if thou hast eyes to see:

She has deceived her father, and may thee. (1.3.293-94)

事実、この Brabantio の予言を実現するかのようには、Desdemona は劇中において、Othello を指揮する女性として表象される場合さえあるのだ。Cassio が彼女を “our great captain [Othello]’s captain” (2.1.74) と評し、Iago が “Our / general [Othello]’s wife is now the general” (2.3.309-10) と述懐するとき、さらに、Cassio のために主人を一睡もさせないようにしましょう、と彼女が次のように胸を張って答えてみせるとき、Desdemona は近代初期英国における典型的な女丈夫像に限りなく近づいていく。<sup>1)</sup>

My lord [Othello] shall never rest,

I’ll watch him tame and talk him out of patience,

His bed shall seem a school, his board a shrift,

I’ll intermingle everything he does

With Cassio’s suit. . . . (3.3.22-26)

だがそれ以上に本稿にとって重要なのは、Bristol がシャリヴァリを次のように定義しながら、祝祭を構成する「男性同士の結束」(“male solidarity”)に関しては、Eve Kosofsky Sedgwick の *Between Men* を参照せよ、と注をつけている点である。

Charivari was a practice of noisy festive abuse in which a community enacted its specific objection to inappropriate marriages and more generally exercised a widespread surveillance of sexuality. As Natalie Davis has pointed out, this ‘community’ actually consists of young men, typically the unmarried ones, who represent a social principle of male solidarity that is in some respects deeply hostile to precisely that form of institutionally sanctioned sexuality whose standards they are empowered to oversee. (142)

確かに Sedgwick はその著書において、ここで Bristol が言及する “male solidarity” を、

“male bonding” および “homosocial” という言葉で明瞭に説明している。いわく、「ホモソーシャル」とは、ホモセクシュアリティに対する恐怖や嫌悪、つまり強烈な同性愛嫌悪によって特徴づけられる「男性同士の絆」(“male bonding”) のような実践に関して用いられるものである、と(1)。

ここでわれわれは、はたと当惑せざるをえない。上に引用した Bristol による、“male solidarity” を軸とするシャリヴァリの定義には、同性愛嫌悪については一言もふれられていないからである。Bristol は、Sedgwick による “homosocial desire” の定義の表層部分だけをすくいとり、それと表裏一体の関係にある同性愛嫌悪の概念を無視して、シャリヴァリにおける “male solidarity” を説明しようとしているのではないか。

*Othello* における男性同士の絆と同性愛嫌悪の関連性を探るために、われわれはさっそく本劇のテキスト分析を開始しなければならない。

### III

IAGO I lay with Cassio lately

And being troubled with a raging tooth  
I could not sleep. There are a kind of men  
So loose of soul that in their sleeps will mutter  
Their affairs — one of this kind is Cassio.  
In sleep I heard him say ‘Sweet Desdemona,  
Let us be wary, let us hide our loves,’  
And then, sir, would he gripe and wring my hand,  
Cry ‘O sweet creature!’ and then kiss me hard  
As if he plucked up kisses by the roots  
That grew upon my lips, lay his leg o’er my thigh,  
And sigh, and kiss, and then cry ‘Cursed fate  
That gave thee to the Moor!’

OTHELLO

O monstrous! monstrous! (3.3.416-28)

この台詞は、「唇に生えた／キスを根こそぎ抜こうとするかのように、／Cassio がわたしからキスを奪った」(424-26) という箇所が植物に潜むエロティシズムさえ連想させ、しかもそれが Iago の人間観 — “Our bodies are gardens, to the which our wills / are gardeners” (1.3.321-22) — を想起させる点でも興味深いが、Jonathan Dollimore が指摘するように、なによりも Iago の同性愛的欲望がこの台詞の基調となっていることに注意したい (157-62)。そしてこの同性愛的欲望は、Alan Bray が解き明かした同性愛をめぐる歴史的コンテクストに移しかえられるならば、たちまちその鮮明な歴史的相貌を顕にするはずである。

近代初期英国において、「ベッドをともにする者」(“bedfellow”)という表現は、同性愛的感情・行為の有無に関りのないレベルで、寝台を舞台にして築かれる強力な友愛関係・信頼関係を意味した、と説く Bray の指摘にここで耳を傾けてみよう(“Homosexuality and the Signs” 42-43)。Bray は大主教 Laud の夢を引用しながら、「ベッドをともにする者」のあいだには寵愛関係すら育まれる可能性のあったことを検証している。1625年8月、Laud は自分がみた夢を日記にこう記している。

That night in a dream the Duke of Buckingham seemed to me to ascend into my bed, where he carried himself with much love towards me, after such rest wherein wearied men are wont exceedingly to rejoice; and likewise many seemed to me to enter the chamber who did see this. (qtd. in “Homosexuality and the Signs” 43)

ベッドの上で庇護者 Buckingham 公爵から大主教に深い愛情が注がれるだけでない。夢の最後で語られているように、ベッドはもはや私的な空間ではありえず、そこで醸成された愛情と友愛関係は公のものとならねばならないのである。この大主教の夢を下敷きにして、先ほどの Iago の台詞を Othello の立場から分析するならば、夢のなかで語られる Cassio の言葉は、Iago と Cassio の深い友愛関係に裏打ちされた真実にほかならず、その真実は第三者たる自分に公表されねばならない、と Othello に確信させるだけの「充分な証拠」(“a living reason” 3.3. 412) となりえたとはいえない。

なるほど、同性の者同士の同衾が、当時ありふれた習俗であったことも確かであるが、そうした習俗が同性愛行為にまで進展していく可能性があったこともまた否定できないのである。Bray は、1630年の四季裁判所(Quarter Sessions)において、強制猥褻という形で扱われた事件をとりあげて、その事実を詳細に検討している(*Homosexuality* 48, 68-69, 76-77)。同性愛行為がおこなわれた場所は、Somerset 州 Minehead。未婚の使用人 Meredith Davy は、徒弟仲間である John Vicary という名の12歳くらいの少年と日頃ベッドをともにしていたが、日曜や休日になると酒を飲み同性愛行為にふけるようになり、あげくのはて、少年に性的虐待をくわえたかどで訴えられたのである。Davy 自身は、それを黙認していた徒弟仲間と同様に、自分が行っていた行為が男色のそれであるとは少しも認識していなかったこと、釈放されたのちも、相変わらず彼が少年と添い寝していることを考慮に入れるならば、当時の「ベッドをともにする者」にとって、単なる添い寝と同性愛行為とのあいだに境界線は引きにくいばかりか、前者が後者へととも簡単に進展しうる可能性も充分にあったことは確かであろう。

Dollimore は上に引用した Cassio の夢物語を語る Iago の台詞に関して、ほんらい Iago に備わる同性愛的欲望が、Cassio のそれへと置換されているのであろうか、あるいは、Iago の同性愛的欲望こそが彼の「動機なき悪意」(motiveless malignity) の本当の動機なのだろうか、と問いを投げかけている(158)。しかし、ここでわれわれにとってとりわけ重要なのは、欲

望の置換とか悪意の動機などではなく、Iago の同性愛的欲望が顕在化するこの状況で、彼が Desdemona という女性の役割を引き受けている点である。

実は、彼が女性役を引き受けるのはこの場面が初めてではない。すでに二幕一場、Cyprus 島に無事上陸した Desdemona たちを前にして、Iago は「詩を司る女神」(“my muse”) と一体になり、女性嫌悪の伝統に棹さず機知を披露しているのである。<sup>2)</sup>

IAGO . . . but indeed my invention  
Comes from my pate as birdlime does from frieze,  
It plucks out brains and all; but my muse labours  
And thus she is delivered:

. . . . .

DESDEMONA . . . What miserable praise hast  
thou for her that's foul and foolish?

IAGO There's none so foul, and foolish thereunto,  
But does foul pranks which fair and wise ones do. (125-28, 139-42)

IAGO Come on, come on, you [women] are pictures out of doors,  
Bells in your parlours, wild-cats in your kitchens,  
Saints in your injuries, devils being offended,  
Players in your housewifery, and housewives in . . .  
Your beds! (109-13)

女性嫌悪の言説を孕んだ、詩神たる Iago が「産気づく」(“labours”)。先ほど引用した、Desdemona の不貞を臭わせ、女性嫌悪を頭にする Iago の台詞 (3.3.416-28) — ベッドのなかで彼の耳に囁かれる Cassio の睦言 — が、Othello と Iago の連帯を加速することをここで思い出すならば、本劇において女性嫌悪のイデオロギーは、男性同士の絆を強めるだけでなく、その連帯に加わる者にジェンダー転換を促す働きをしていると言えよう。

#### IV

Shakespeare が活躍した近代初期英国において、男性間の愛情と友情を賞揚した古典として、Cicero の *Laelius de amicitia* (B.C.44年) ほど人口に膾炙したものはなかったであろう。次に引用する、その一節などは、男性同士の友情をテーマにした初期喜劇を執筆する Shakespeare に、詩的靈感を与えていたに違いない。<sup>3)</sup>

It is goodness, human goodness, I say, Gaius Fannius, and you, Quintus Mucius, which both brings friendships together and preserves them. In it is found all harmony, stability and trust. Whenever it rises up and shows forth

its light, and sees and recognises the same thing in another, it moves out towards it and in turn receives what the other has to give. Thence love, or friendship (for both have their origin in loving) blazes forth; and loving is nothing other than showing affection for the object of love for his own sake, not because of any lack in oneself, or the prospect of any advantage; though advantage does indeed flower from friendship even if one was not particularly aiming at it. (73)

*Othello* においては、男性間の友情を生みだし、それを保持していく「徳」(“goodness”)とは、「誠実」(honesty)にはかならない。そうした“honesty”を媒介にして Iago と Othello は、*amare* という語に由来する“love” (*amor*) と “friendship” (*amicitia*) を互いに注ぎ込む。

IAGO I humbly do beseech you [Othello] of your pardon  
For too much loving you. (3.3.215-16)

IAGO I hope you [Othello] will consider what is spoke  
Comes from my love. (3.3.220-21)

IAGO I thank you [Othello] for this profit, and from hence  
I'll love no friend, sith love breeds such offence. (3.3.382-83)

IAGO But sith I am entered in this cause so far,  
Pricked to't by foolish honesty and love,  
I will go on. (3.3.414-16)

「劇中において Othello は Desdemona と離縁し、Iago と再婚する」と名言を吐いているのは James L. Calderwood であるが (75)、その Othello と Iago の「結婚」が最終的に成立するのは、三幕三場である。Othello が、不義を犯した者に対する思いを「黒海」(“the Pontic sea” 456) から流れ出す滔滔たる水の流りに喩えながら復讐を誓うとき、Iago は次のような婚礼の誓詞を連想させる言葉でその誓いを結ぶ。

Do no rise yet. *Iago kneels.*  
Witness, you ever-burning lights above,  
You elements that clip us round about,  
Witness that here Iago doth give up  
The execution of his wit, hands, heart,  
To wronged Othello's service.



.....

I am your own for ever. (465-70, 482)

Othello とともにひざまずいて祈り、“I am your own for ever” と唱えるとき Iago は花嫁の役を演じている、と Calderwood は指摘するが (113-14)、それは的是なずれであろう。なぜならば、この祈りの場を契機に「嫉妬」(“jealousy” 3.3.180) という名の「怪物」(“a monster” 3.4.161) を孕み、それを「出産する」女性の役を演じるのはもはや Iago ではなく、Othello なのであるから。

OTHELLO By heaven, thou [Iago] echo'st me

As if there were some monster in thy thought

Too hideous to be shown. (3.3.109-11)

Othello がこのように Iago に語りかけるとき、「示す、顕わにする」を意味する *monstro* から派生した “monster” は、すでに Iago の「思考」(“thought”) 内には存在せず、Othello 自身に転位し、そこで嫉妬という「怪物」に変容したあげく、Desdemona 殺害という形でその姿を顕にしようとしている。

IAGO I have't, it is engendered! Hell and night

Must bring this monstrous birth to the world's light. (1.3.402-03)

Othello が宿す「怪物」を取りあげるのは、上の台詞で語られているような “Hell” や “night” ではなく、Iago 本人である。

OTHELLO Therefore confess thee [Desdemona] freely of thy sin,

For to deny each article with oath

Cannot remove nor choke the strong conception

That I do groan withal. (5.2.53-56)

ここに引用したのは、Othello が Desdemona に罪の告白をせまるときに、彼が口にする台詞である。55行目の “conception”、次行の “groan” は、それぞれ「考え」、「苦しむ」という意味に一義的には解釈することができよう。だがしかし、アーデン版 (the Arden Shakespeare) の編者 E. A. J. Honigmann がこの箇所注に注釈をくわえているように、どちらも妊娠と出産に縁の深い言葉であることを忘れてはならないだろう (309)。とくに後者の「出産のさい妊婦が苦しみの声をあげること」をも意味する “groan” は、第 I 章でわれわれが確認した、1716年、Westonbirt で催された制裁儀礼「偽の出産」(“Mock Groaning”) の犠牲者 — 妊婦を演じる Walter Lingsey — を連想させずにはおかないのである。Othello 自身の言葉 — “A horned man's a monster” (4.1.62) — が物語るように、彼は自分が寝取られ男という「怪物」に変身したと思ひ込むだけでなく、男性同士の絆から生じた「怪物」 — 嫉妬 — を孕み、産婆役を務める Iago の助けをかりて、それを出産するのである。本劇が初演されてから百年以上のちに、Westonbirt 村の楡の木陰で「男児」を出産する Lingsey は、明らかに

Othello の末裔なのである。

## V

Whereas Domingo Cassedon Drago a negro is to be removed by His Majesty's writ of habeas corpus out of the gaol of this county and is to be sent into the county of Essex, to be tried there at the next Assizes for a buggery by him committed; and whereas there is a poor boy named William Wraxall now remaining in the custody of Edward Graunte tithingman of Northwood, which is to be sent to the said Assizes for evidence against the said negro to prove the said fact; it is therefore thought fit and ordered by this court that the said boy shall be forthwith delivered over to the Sheriff of this county, who is desired to take such care that the said boy may be sent to the said Assizes with the said negro by some honest man who will be careful to produce the said boy at the trial of the said negro to prove the said fact. (qtd. in Bray, *Homosexuality* 40)

Bray は上記の引用とともに、男色の罪で1647年の西部巡回裁判 (the Western Assizes) に召喚された黒人 Domingo Cassedon Drago の存在に光をあてながら、17世紀半ばの英国では非ヨーロッパ系の人びとが男色者と結びつけられる傾向があったことに注意を向けている (72)。この Bray の指摘を考慮に入れるならば、人種的他者たるムーア人を主人公に配した *Othello* において、プロットの進展にしたがって男性同士の絆が、同性愛的色彩を強めていくのはむしろ当然のことと言えるかもしれない。

Henry Peacham はエンブレム集 *Minerva Britanna* (1612年出版) の中で、「重罪」 (“*Crimina gravissima*”) と題する図像に、次のようなエピグラムを添えている。<sup>1)</sup>

Vpon a Cock, heere *Ganimede* doth sit,  
 Who erst rode mounted on *IOVES* Eagles back,  
 One hand holdes *Circes* wand, and ioind with it,  
 A cup top-fil'd with poison, deadly black:  
 The other Meddals, of base mettals wrought,  
 With sundry moneyes, counterfeit and nought.  
 These be those crimes, abhorr'd of God and man,  
 Which Iustice should correct, with lawes severe,  
 In *Ganimed*, the foule Sodomitan:  
 Within the Cock, vile incest doth appeare:  
 Witchcraft, and murder, by that cup and wand,

And by the rest, false coine you vnderstand. (48)

このエピグラムにおいては、「妖術」(witchcraft)、「毒殺」(poisoning)、そして Ganymede (“Ganimede”、“Ganimed”) に表象される「男色」(sodomy) が同列に扱われているが、娘の心を奪うのに妖術を用いたと Othello を弾劾する Brabantio の台詞 (1.2.63-79) や、“My medicine, work!” (4.1.45) と己の企みを毒薬に喩える Iago の台詞を思い起こすなら、Othello における同性愛の存在を指摘するのも、決して牽強附会ではないはずである。

ただし本劇において特徴的なのは、Iago と Othello が結ぶ男性同士の絆が、劇の通奏低音となって響くシャリヴァリやラフ・ミュージックの調べに合わせて語られるとき、いつしか同性愛嫌悪の観念に満たされていくことである。とくに Iago の場合、女性嫌悪のイデオロギーに貫かれた言説を産み出す詩神と化すだけでなく、「シャリヴァリ」の犠牲者 Othello を妊婦に見立て、自分は産婆役を務めるだけでなく、嫉妬という名の「赤子」の出産を傍観し嗤う、見物人＝同性愛嫌悪者の役も演じているのである。民衆的制裁儀礼という視座から、Othello の「喜劇的な下部構造」を照射した場合明らかになるのはやはり、Iago が自分を評した言葉——“I am not what I am” (1.1.64) —— が明瞭に物語るような、彼の Proteus 的なとらえどころのなさなのである。

## 注

- 1) 近代初期の家父長制度の掟を侵犯する女性と Desdemona の関連については、Linda Woodbridge を参照 (195-99)。
- 2) 二幕一場において表象される女性嫌悪とその系譜については、Valerie Wayne を参照。
- 3) *Laelius de amicitia* と近代初期英国文化との関連性については、Bruce R. Smith を参照 (35-36)。
- 4) *Minerva Britannia* における “*Crimina gravissima*” の図像と、近代初期英国における同性愛の関連については、Mario DiGangi を参照 (103-04)。

## 引用文献

- Bray, Alan. “Homosexuality and the Signs of Male Friendship in Elizabethan England.” *History Workshop Journal* 29 (1990): 1-19. Rpt. in *Queering the Renaissance*. Ed. Jonathan Goldberg. Durham: Duke UP, 1994. 40-61.
- . *Homosexuality in Renaissance England*. London: Gay Men’s, 1982.
- Bristol, Michael D. “Charivari and the Comedy of Abjection in *Othello*.” *Renaissance Drama* 21 (1990): 3-22. Rpt. in *Materialist Shakespeare: A History*. Ed. Ivo Kamps. London: Verso, 1995. 142-56.
- Burke, Peter. *Popular Culture in Early Modern Europe*. London: Smith, 1978.
- Calderwood, James L. *The Properties of Othello*. Amherst: U of Massachusetts P, 1989.
- Cicero. *Laelius de amicitia*. Trans. J. G. F. Powell. *Cicero: Laelius, on Friendship and the Dream of Scipio*. Ed. J. G. F. Powell. Warminster, Eng.: Aris, 1990. 1-118.
- DiGangi, Mario. *The Homoerotics of Early Modern Drama*. Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture 21. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

- Dollimore, Jonathan. *Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Clarendon, 1991.
- Peacham, Henry. *Minerva Britannia 1612*. 1612. Leeds, Eng.: Scolar, 1966.
- Rollison, David. "Property, Ideology and Popular Culture in a Gloucestershire Village 1660-1740." *Past and Present* 93 (1981): 70-97.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Shakespeare, William. *Othello*. Ed. E. A. J. Honigmann. The Arden Shakespeare. Walton-on Thames, Eng.: Nelson, 1997.
- Smith, Bruce R. *Homosexual Desire in Shakespeare's England: A Cultural Poetics*. Chicago: U of Chicago P, 1991.
- Wayne, Valerie. "Historical Differences: Misogyny and *Othello*." *The Matter of Difference: Materialist Feminist Criticism of Shakespeare*. Ed. Valerie Wayne. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1991. 153-79.
- Woodbridge, Linda. *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620*. Urbana: U of Illinois P, 1984.